



新連載 一宮 茂子

皆さま初めまして。2006年に立命館大学院応用人間研究科を修了し、2014年に先端総合学術研究科を修了しました一宮茂子(いちのみやしげこ)と申します。

現在は生存学研究センターの客員研究員です。私の研究テーマは、生体肝移植で臓器をもらった人(レシピエント)ではなくて、臓器をあげた人(ドナー)をめぐる問題です。このたび『生体肝移植ドナーをめぐる物語』として紹介させていただきたいと思います。どうかよろしく願いいたします。

新連載 松岡 園子

今号から連載のお仲間に入れていただきました、松岡園子です。今年の3月に、立命館大学・応用人間科学研究科を修了いたしました。

私は当事者的視点から、自分が10代で体験してきたことを修士論文としてまとめました。これまで自分の体験を話すことで、「苦労したのね」と言われることも多かったのですが、私は自分の人生を、特別な苦労をしたと思って生きてきたわけではありませんでした。むしろ、「得をした」と思っていたほどです。

社会の中で当たり前だと思われている

王道がありますが、違う道を選択した者が見てきた世界にそれまでとは違う気づきがあったのだとしたら、それを皆様と共有することには価値があると思います。社会的養護、精神保健、ひとり親家庭、介護、ヤングケアラー、不登校、定時制高校などのキーワードに関心をお持ちの方にお読みいただけますと、当事者的視点から何か伝わるものがあるかもしれません。また、伝えることができるように頑張って書いていきたいと思えます。

私は文章、特にお話を書くことが好きです。4月から小説教室に通い始めましたので、新しく自分の体験を小説としてまとめることに挑戦してみたいと思い、自伝的短編小説という形での連載を始めさせていただきます。どうぞよろしく願い致します。

新連載 中條 與子

4月から、いろいろな方のお蔭でご縁をいただき、新しい職場で働いている。職場の敷地内には、いろいろな花が、桜の頃からリレーのように咲いて、いまは紫陽花だ。日日、雨に打たれながら、風に吹かれながら、陽に照らされながら、花卉の色が少しずつ淡くいろどり、広がりながら変化する様子を楽しんでいる。

杉江 太郎 第二回

4月に人事異動があり、いろいろな意味で変化があった数か月。職場のトイレの仕様が変わったり、出勤途中で寄るコンビニも変わったり、また職場の雰囲気もまったく変わりました。その変化を楽しみながら生活をしています。



もともと、職場にコーヒーをまとめ買いして、「カフェドウスギエ」として置いていたのですが、当然オーナーの転勤により、店舗も移転となり再稼働することになりました。

ここで問題が。売り上げが伸びないので。在庫過多です。今までは、コーヒーが良く売れていましたが、今では、コーヒーよりもラテなどの甘い系が好調。仕入れ状況をさっそく変化させて、新しい環境に適応しつつ、皆の好みを調査しています。天気や、職場の空調の具合も影響しているようです。当然ですが、利益はありません。むしろ赤字(数十円～数百円)になることもあります。その分はたまにポイントで回収が出来ます。そんな風に、職場に「余地」を持ちながら今日も元気に活動しています。

迫 共 第二回

私の名前は「迫 共」と書いて「さこともや」と読みます。

学生相手には、初回の授業で「さて、なんと読むでしょう?」というクイズにして、最初に正解をだした学生にジュースをおごっています。

シンプルで書きやすい名前のはずですが、なぜか画数の多い方に間違われます。大学の事務方からも「迫先生」とか「泊先生」と書かれたりします。

記名を求められる場面では「フルネームで書いてください」と言われることが多い名前です。

電話口で「どんな漢字ですか?」と聞かれたときは「迫力の迫、共産党の共です。以上です!」と元気に答えるようにしています。

朴 希沙(Kisa Paku)

突然ですが、6月より3ヶ月間フィンランドに行きます。フィンランドには去年から行ってみたいと強く思っていたものの、その機会もお金もなく行けずじまいでしたが、今回ひょんなことから全く偶然に行けることになりました。

門はたたけば開かれるのか?と調べてしまいそうになるほど、幸運なことです。渡航にあたり、フィンランドに関する入門書的なものも読んでいます。

フィンランドと日本は歴史も人口も気候も国の制度も色々違うようです。実際生活することでどんな新しい経験ができるのか、とても楽しみにしています。

復活1 浅田 英輔

ご無沙汰しておりました。現在、県庁の高齢福祉保険課に勤務しており、高齢者施策にかかわっております。高齢者部門にもさまざまな対人援助職の方がいらっしゃいますが、心理職がほとんどいない。都会にいけばいるんでしょうが。できることがたくさんありそうな感じがします。今の立場はただの行政職ですが、ワークショッブなどに入ると「なんだこの県職員は」(ふつーに溶け込んでいる)という反応があって楽しいです。新連載では好きなこと書きます。がんばります。

三浦 恵子

平成30年度が始まり、新しい業務に従事することとなった。公僕として何年奉職しても、新たな異動先や新たな部署での勤務は気持ちが引き締まる。経験を積み重ねることはもちろん大切だが、経験値のみに依拠して業務を行ったり生活上の課題に対処することがないよう、常に自分を諫める毎日である。単身赴任生活も5年目に入り、業務と義父母の遠距離介護の両立もはや日常となったが、思わぬ場面で思わぬ示唆を得て事態が進展することもある。今年度も多くの出会いと学びあいの機会があることを願っています。

寺田 弘志

最近、ホームページを作り直す作業をしている。

KDDI(au)さんが昨年10月にホームページ事業を廃止した。

当院のホームページも消滅してしまった。タイミングよく、ホームページ製作のS社が営業に来た。

予約システムもつけてくれると言うので、頼むことにした。

まずは、コンテンツを無料のホームページJimdoにアップすることにした。

ところがその作業中にS社が予約システムを作れないと言ってきた。

しかたなく自分で予約システムを作ることにした。

といってもあくまでも無料のプログラムを使っただけの話だ。

はじめはリクルートの予約システムを使ったが、フリーズすることがわかった。

つぎにWordpressのプラグインで作ってみたが、使い勝手が悪かった。

いくつか作ってみて、最終的にはWixの予約システムを使うことにした。

動作が遅く、キャンセルや変更がお客様がわからできないという不便さはある。

しかし、Wixの予約システムが一番シンプルで使いやすかった。

試行錯誤の末、とりあえずWeb予約のできるホームページができた。

まだ、コンテンツが入っていないところも多いが、よろしければご笑覧ください。

<https://teradasekkotuin.jimdo.com/>
寺田接骨院

飯田奈美子

この4月から娘は認可保育園に入所しました。それまでは定員5名の託児所(のような保育室)に通っていたのですが、そこを卒業して定員120名の保育所に通うことになりました。明るく人見知りのしない性格の娘ですが、新しい保育園に慣れるか親としては、心配です。最初の1か月はお友達ができず、保育園に行きたくないと泣く日もありましたが、心を鬼にして保育園に預ける日が続きました。ある雨の日、大泣きをして保育園に行きたくないと叫んでいる娘を見て、親のほう心が折れそうな気持ちになりました。しかし、その翌日になると「〇〇ちゃんと遊びたいから早く保育園に行く！」と乗り気な発言に変化。改めて子供の適応力にはびっくりしましたが、「待つ」ということも大切だなということも感じました。子どもの力を信じて待つことしか親はできないものですね。娘から多くのことを学んでいます。

川本 静香

この4月に山梨県甲府市に引っ越ししました。甲府は京都とおなじく盆地なので、気候は変わらないだろうと高をくくっていたのですが、湿度がなんだか違う気がします。

新しい環境になれるのは、本当に苦手なので、只今絶賛不応中にして、先日ついに体にきたのか、ひどい喉風邪をひ

いてしまい、声が全く出ない状況になってしまいました。

あまり無理せず、ぼちぼち甲府に慣れたいと思っている、今日この頃です。

山口洋典

デンマークのオールボー大学を拠点とした一年間にわたる学外研究を終え、3月末に帰国いたしました。湿度の高さと押印と長時間の会議という、少し忘れかけていた組織文化に対して、最初はささやかな抵抗感を抱きつつも、程なく順応してしまっています。ところが、先日、仕事を終えて自転車にて大学を後にした際、横から走ってきた自転車との衝突を避けるべく急ブレーキを掛けたところ、前輪がロックしてしまい、慣性の法則によって道路に身体を打ち付けてしまいました。幸いにして骨折ではなく捻挫で収まったものの、救急車での搬送(外来の診察受付終了時間だったため)を経て、三角巾(皆がやさしくくださいます)とロキソニンテープのお世話になっており、怪我人としての生活体験もまた、対人援助の知恵を紐解く手がかりになるかもしれない、など転んでもただでは起きない大志を抱いております。(写真、学生時代の「もらい事故」以来の救急車の車内にて、事故の高揚のためか自他ともに高い血圧に驚いていた際の風景。)



関谷 啓子

今年のGWは憧れの子鹿田焼きの窯元を訪ねる事ができた。大分県の日田市の近く皿山という山の中の小さな集落だ。

一昨年の豪雨で壊滅的な被害を受けたと知り、居ても立っても居られなかったのが集落に入る道は寸断され、暫くは近づけないと聞いていた。

ところが、このGWに西鉄バスが日帰りのツアーを組んだと聞き、矢も盾もたまらず出かけた。すぐ近くの小石原焼の窯元とセットでのバスツアーである。

抜けるような上天気の中、新緑の山々を超えてたどり着いた村は静かな落ち着いた小さな里だった。

集落に入ると、伸びやかな音がして、それが唐臼の音だと気づくのに二つも角を曲がらなければならなかった。何度も何度も写真で見ていた唐臼が、まるでカマキリが斧を振り下ろすようにうごいている。

裏山から掘り出された土が細かな粉状になるまでひき続けるという。清流にかかっていた水車は流されてしまったけれど唐臼は復元されのんびりと動き続けていた。

一子相伝、蹴り轆轤、登り窯、10軒の窯元を増やさない、焼き物に窯元の名を入れないなどなど。その昔、バーナード・リーチが村を訪れ、古老たちに託した約束を愚直に守って今日を迎えている。出来上がった焼き物はいささか無骨ではあるが、力強く溢れ出る力が漲り、一度見たら忘れられない陶器だ。

昔、友人宅で見た一枚の皿が忘れられず、いつかきつと…と思い続けて来た。一緒に行った従姉妹とお揃いの湯のみ、梅干しを入れる壺、小鉢、肩に食い込む程リュックに詰め込んで帰路に着いた。

血山の里の畑に少し強い風が吹くと、横一列に吊された数十匹の鯉のぼりたちが一斉に水平に泳いでいた景色が忘れられない。

70歳にして忘れられないGWになった。思い続ければ本当に叶うのだなあ…有難い！

黒田 長宏

3月11日記す。東日本大震災から7年経過するのか。私は当時43歳だった。今日も休みだが、当時も休みで、スポーツジムに出かけたのだろうが、外出していて、その頃温泉に通うこともあったが、その日

はジムから温泉とは梯子せずに家へ帰ったのだった。当時65歳だった母親が裏の畑で作業中で、帰宅後に家に入らずそれを直に見にいった途端、母親と少し話した途端、眩暈を起こしたのかと思ったら、立っていられなくなったかは記憶にないが、地面にひびが入っていた。その後、家の前に母親と出た。すると一度地震が起きた後にまた大きなのが起きたと思う。物置の窓は割れてしまった。現在は老人ホームにいる、隣のおばあさんが家にやってきた。温泉に行く途中の橋が崩れて車から湖に落ちて死んだ人が出たと後で知った。私もその橋を渡っていた可能性もあったし、家の中はぐちゃぐちゃだったので家の中にいたら何か当たって怪我をした可能性もあったが、裏の畑仕事をしていた母親に直に会いにいったというのが地震の時だったと言うタイミングを今でも不思議な縁だと思う。今年の1月亡くなった祖母は当時83歳だっただろうか。デイホームサービスにいて、そこで地震に遭遇した。思えば、祖母とデイサービスセンターの関与も深かっただろう。祖母は大震災もデイサービスに居て、7年後に心肺停止をそこで起こすのだ。そこで一旦だが、奇跡的に蘇生した。当時、被災者は地震関連地域の高速道路が無料という特典が出て、それを機に、2011年は何度も福島県に行った。高速無料が無ければ行かなかっただろうが、義援金の入金は一度きりだったが、福島県に直接行くことで、ガソリンや食費で消費することで福島県にお金を落とせると思った。だが、いわき市などの被害の甚大だったところは回避してしまった。怖かった。この目で見た被害を見たほうが良かったのか、見なくて良かったのか。見る機会は逃してしまった。機会を損失したかも知れない。ただ、自分自身の周辺も前代未聞の被害ではあったが、福島県の海沿いとは、それでさえも比べ物にならないだろう。それに福島原発のそばには心理的に近づけなかった。その年は5回は超えたか、記憶が定かでないが複数回行ったし、原発反対デモにも参加したりと、当時の福島県訪問の放射能の被ばくの影響が私にもあったのかさえわからない。安易に書けないところだ。もっばら、喜多

方ラーメンを食べると、スパリゾートハワイアンズの踊りを見にいった。プールが使えず踊り場が隔離されていた。一度、昔の政治家の伊東正義さんの資料館に行った。原発関連の蔵書もあり、彼が生きていたら、脱原発に向けて政治をしていたのではないかと信じたかった。話が前後するが、反原発デモに出たりもしたが、福島県訪問もデモに出るのも、2011年に数度程集中したばかりで、翌年からは行動していない。朝の3時に車で出発して、夜の11時に帰宅した。翌日勤務が休みの時にしたのだが、今ではその勇氣はない。往復400キロくらいにはなったのだろうか、もっとか往復600キロか。詳細に数値を覚えていない。次の日は昼近くまで寝ていたと思う。あまり深夜から早朝にラジオは聴かないからだろうか、ほんのたまに聴くと、とてもさみしいような不思議な感覚を受けるのだが、『走れ、歌謡曲』だったか、それもそうだし、番組はそれか確かではないが、吉田拓郎の『祭りのあと』が流れて、なぜか感情を刺激した。また、『ラジオ深夜便』だったか、暗い雰囲気も含めて、日中のラジオに比べて高級のような独特な感覚を受けた。詳細はまるで忘れていたが、これを機に思い出し、断片からネット検索すると、山内晴子氏が朝河寛一の研究所を出版して、その話だったらしい。朝河が、英単語を覚えると辞書を食べた話や、戦争は日本は負けるだろうと早くから警告していたというような話をされていたと思う。

鶴野祐介



6月1日から4日まで、韓国中西部の町・光州市で開かれるアジア民間説話学会に行ってきます。今回エッセイで取り上げた「浦島太郎」における「水界」イメージについて発表する予定です。

韓国や中国にも類似する話があるので、東アジアの人びとに共通する「水界」イメージとその背景にある精神世界について議論できるものと期待しています。

もちろん食事や遠足、そして2年ぶりに再会する外国の会員との交流もとても楽しみです。旅の無事を祈りつつ。

臼井 正樹

「介護福祉を巡る断章」と題してはじめての拙文も早いもので第7回目となる。

今回は、2017年度に指導した大学院生の論文のエッセンスを紹介した。二人とも優秀な学生で、2年間で修士論文を仕上げた。楊夏麗は、中国での大学時代も日本語を勉強していたとはいえ、2年程の間に日本語の能力は極めて向上した。2年目の中ほどまでは、日本語の添削をしながらの研究計画や論文作成であったが、終盤ではそうした部分もほとんどなくなり、日本人の学生に負けないレベルであった。また松田愛美は、研究の方法や論文の書き方など、あまり指導することもなく、自ら大学の図書館で先輩たちの修士論文を読み込み、先行研究を調べていく過程で、研究に必要な知識、技術を身につけてくれた。私のように出来の悪い大学教員にとっては、とてもありがたい大学院生であった。

私自身の教員生活も残り1年足らずとなってきた。本年度の残り3回の連載で一区切りできればと考えているところである。

山下桂永子

書きたいことが固まってきたら書こう、と思ってるうちに書かないままに日が経って、とにかく書かなきゃと思って書き出すと、書いているうちに書きたいことが出てきます。書いているうちに書きたいことが変わって行って、書き終わるときには書きたいことが書けてはいない気がします。そんなリフレイン×7回目。そんなものなのでしょうか。表現って難しい。表現するってこういうことか。こんな仕事をしているのに、いまさら思っています。

そんなこんなで町家合宿もリフレインしながら12年目になりました。今回のテー

マは「食」です。前述の通り、書いているうちに書きたいことが出てきて、全然書ききれなかったのが、二部構成でお届けします。今回最後の一文を書いてみて、思ったことは「おかあさん、いつもごはんを作ってくれてありがとう」です。読んでいただければ幸いです。

尾上明代

体を動かすことに関しては基本的に私はダンスが好きなのだが、気に入ったダンスができる場所と時間がスケジュール的に合わず、結局、春休みから太極拳を始めた。ゆっくり動きながら体中に気を巡らせるのも結構良い感じがする。ふりつけ(?)は難しくなかなか覚えられないので自習はできず、またその時間もない。本当は毎日できたらどんなに健康に良いだろうと思うが、今は週一回行くのがやつの状況。今の私の生活は、どこかに出かけるときは、いつも急いでいるし、やることリストも全くなくならないし……。

10年かかるという人もいるし、一分の練習は一分の成果があるという人もいる。どちらも真実の一端だろう。たとえ週一回一時間でも、ゆっくり動く時間は貴重だ。もちろん、太極拳はもともと武道なので、単なるリラックスとは違うようだが、ゆったり流れる音楽に乗せた動きと、中国語の発音がすごく上手な先生の「イーアールサンズウ…」の響きが気に入っている。

小池英梨子

飼い猫ノラ猫に戻る。

前回の連載まで、立命館大学応用人間科学研究科で飼い猫(常勤)として働いていました。今年の4月から、再びノラ猫生活をしている小池です。飼い猫時は有休が10日もあったのに8月で使い果たしました。猫の問題は休日限定で起きてはくれないし、行政の方と連携しようとするだけでも平日に動く必要が出てきます。動物の活動はまだまだ考えたいこと、勉強したいこと取り組んでみたいことが沢山あります。自由時間がどーしても欲しいので、一般的な就活はしてません。沢山お金を稼ぐことはできなくても、生きていけるレベルで自分がやるべきだと思うこと、面

白いと思えることに取り組んでいこうと思えます。これからも関心をもって見守ってください(^_^)

松村奈奈子

今年のGW.

ちょっくらドライブ旅行にでかけるか一、と旦那と渥美半島に。連休も終わり頃の高速は思ったより空いていて、いい感じでスタート。渥美半島の端っこの伊良湖岬、きれいでした。

岬から小さな島が見えます。小説「潮騒」の舞台「神島」。今は人口400人にも満たない島です。むかしむかし、三島由紀夫が滞在して「潮騒」を書きあげたとか。これまでの映画化で、何度もロケ現場にもなってます。

私、思想うんぬんはさておいて三島由紀夫の文章が大好き。美しい文章だなあと、ほぼ全作もってます。思わず船に乗って、三島の歩いた道を歩いて、なんだかよいGWでした。



そしてそして、実は私「島」が大好き。これまで瀬戸内の小島を中心に、十数個の島を訪ねています。

「神島」一周の遊歩道は4キロ程ですが、激しい高低差があり、まるで軽いトレッキングでした。へたって夫婦2人して港のベンチで寝転がっていると、若いお母さんと子どもが島のヒジキを手にとってきました。カワイイ押し売りです。「大変だったでしょ」「わたしらでもあんまり山の高いところは行かんしね」と雑談しながらねぎらつくれたので、思わずヒジキを大量買いしてしまいました。船の出港が近づくと、風呂敷代わりの大漁旗に売れ残ったヒジキを包んで背負い、仲良く話しながら帰る母子の姿。島に住む人の生きていく様に、私はいつも「じーん」ときてしまいます。

奥野景子

4月からあんまマッサージ指圧師の専門学校に通っている。3月末に仕事を辞め、久しぶりに『ザ・学生』をしている。

新天地での生活を通して‘色々な人がいるもんだな〜’と新鮮さを感じる一方で、自分の頑なさや厄介な部分に触れることもあり、あり余る時間の中で色々な色が混じった時間が過ぎていることも少なくない。

また、4月の中旬、姉から転送されてきた父からのLINEが『旅行中に大腿骨を骨折した。今、診察中。入院、手術予定。市民病院だ。』母が日帰りバスツアー参加中に転んだ人を支えようと一緒に転び、骨折したとのことだった。母は持病がある為、手術にたどり着くまでに少し時間がかかった。色々なリスクと過去の母の手術の記憶ばかりが頭を廻り、医療者としての思考によってどうにか自分をなだめていた。幸いにも手術は成功し、5月中旬に退院できた。少し調子に乗りながらも家での生活を送られているようだ。

今になってやっと生活が落ち着きつつあるように思う。どんな日常が、どんな生活が、わからないなりに過ごせて行けそうな気がしている。

ただ、マガジン執筆者の一人でもある清武さんと一緒にいると今まで出会ったことのない、今までは気が付かなかった少し変わった人と遭遇することがあまりに多すぎる(笑)。私が出会う変わった人は、一方向性だが、彼が出会う変わった人は、巻き込み型のように感じる。ん？あら？お互いさま…か！？

柳 たかを

「素人工事」

本誌にマンガ「東成区の昭和・やぶにらみ日記」を寄稿させていただいています。

2015年、66歳で芸大教職退職後にDIYで庭に約10坪の小屋を建てる目標をあげ、今その建築木材の刻み作業場として3m×5mのコンクリート作業場兼駐車場を作ろうとやっています。

土木作業は全くの素人ですが、ネットで研究しつつ少しずつマイペースで準備を

続けています。アナログの道具、例えば基礎工事で使う地盤を叩き締めるタンパーなど自分で作れそうな道具はなるべくお金を使わず自作がモットーなので、恥ずかしいですが全くノロノロとカタツムリかなメクジのような工事の進捗スピードです。

肝心の小屋の建築図面も手付かず、無料のCADソフトJWGADを目下勉強中。イメージでは、トイレと流し以外、ガランとした間取りで床だけはしっかり作り、黒光りする板の間のある小さな道場のような小屋にしたいと思っています。

さてヤフオクでゲットしたミニミキサーの助けを借り、約3トンのコンクリートを練って型枠の中に打ち、とどこおりなく均(なら)す作業、プロにはなんでもないので、未経験者の私には不安一杯の工事です。

これがうまくいけば、小屋基礎工事着工へ夢が膨らむと思うのでがんばってみたいと思っていますところですよ。

齋藤 清二

4月から、総合心理学部(大阪いばらきキャンパス)と応用人間科学研究科(京都衣笠キャンパス)、さらに新設の人間科学研究科の講義や演習が始まり、目まぐるしい日々が続いている。授業の準備や学生からのリフレクションへの応答などに追われまくっている感じだが、生活そのものはとても楽しい。たまたま、以前から色々考えていた、「マイフェアレディとピグマリオン」というテーマに、共時的に色々に関連することが浮かび上がり、今回の連載はそれについて書かせてもらった(実は以前に書いたものの再録です。すみません)。人間にとって本質的なことがらは、時を巡りつつ循環を続けるのだなと実感している今日この頃である。

石田佳子

今回は事情があって休載しました。数ヶ月前から視力の低下に気づいていたものの、失明を伴う病の疑いを指摘されると『(精神的に)目の前が真っ暗』になり、ただただ途方に暮れてしまったからです。

長い間カウンセラーとして『共感』を大

切にして来たつもりでしたが、自分が『当事者』になった場合は「世界が裏返ったような衝撃」に見舞われること、他人から安易に「わかる」と言って欲しくないことなどを痛感しました。

精査の結果火急の危機は免がれ、また元の日常(『傍観者』でも居られる世界)に戻ることが出来ましたが、今後は「いつでも世界が裏返る(否応無く『当事者』になる)可能性」を心に留めながら、人生の《残り》時間を大切に使用したいと思っています。

しすてむ♪きよたけ



最近、仕事を断り無職！色々手放し、開業3年目。「清武システムズ(屋号)」の整理をしているところです。

何かをしたい、やれることとやりたいことは、手にしてきているので、具体的に動きたいと思っています。それらを手応えあるよう、自分の手元に引き寄せようと奮闘している段階なので、まだまだ、時間がかかることだと思っています。

たまたま、[HP](#)を更新しているので、ご覧いただけると幸いです。

大した更新はしていませんし、何屋か分かるものではありません。自分でもなに載せよう！？と思い中途半端な更新で終わっていることもあります。でも、やれることがあるって、結構立派だ！と思っています。

逆に、分かりやすい近況としては、5年くらい伸ばしてきた髪を切りました。ロン毛にこだわっているつもりだったけど、別にそうでもなかったみたい。

そうです、僕のこだわりは、ピンポイントではなく、どうやら広い範囲。それが社会のなかでどの範囲なのか、社会に表現するのに苦戦しているのです。

そんなサービス業を営んでいます。

小林茂

年度がわりに、これまで使用していた某携帯電話のキャリアから DOCOMO にキャリアをのりかえた。理由は、某携帯電話のキャリアの接客が悪かったという理由ではない。広い北海道にあって、私の生活圏で国道沿い(浦河～広尾町、えりも町～広尾町)だが電波の届かないところがあり、契約更新月に合わせてのりかえることにした。

ついで、ついにガラケーからスマホになった。スマホにしたとき、それは「私は墮落してしまっただけだ」と思った瞬間だった。文明に抵抗しきれない情けなさを感じた瞬間だった。

恒例の温泉紹介です。小樽駅、信号渡ってすぐにあるホテルです。温泉は、適度な薄明りのなかでゆっくり休めます。ロケーションの良さもあり、お勧めです。

<温泉紹介>

☆天然温泉 灯の湯(小樽 ドーミーインプレミアム)

場所:小樽市稲穂3-9-1

(0134)21-5489

営業時間:5:00～翌朝10:00

※サウナのみ01:00～5:00

利用休止

料金:日帰り温泉はしていない。

泉質:ナトリウム-塩化物・硫酸塩泉(低張性・アルカリ性・温泉)

湧き出し口温度:36.7℃

湧出量:加温、循環

その他:外気浴(岩風呂)、内湯、檜風呂、水風呂、サウナ。

水野スウ

「紅茶の時間」主宰

3年前の猛暑の夏、安保法案の国会中継を横目で見ながら、汗をかきかき本を書いていた。憲法の専門家でもない私が、ふだん着の言葉で書いた「わたしとあなたの・けんぼう BOOK」。その続編「けんぼう BOOK ぶらす」(仮題)を、この春からずっと書いていて、いまだ書き終わりません。

3年前も今も、国会や社会の動きと同時進行で書いています。今ふりかえると、去年の5月3日の憲法記念日に安倍首相が、「2020年を新しい憲法施行の年にする、憲法に自衛隊を明記する」と言い出したあの瞬間、ぞわっと感じた強烈な違和感が、「けんぼう BOOK」の続きを書かなくっちゃ、っていう必然のタネを私の中に植えつけたんだっただけかもしれません。

とにもかくにも、国会があまりにも急スピードでめっちゃめっちゃになっていってるので、本の中味のどれほどかはすぐに賞味期限切れとなるでしょうが、その一方で、賞味期限とかそんなに関係なく、そこにあり続けなきゃいけない普遍的な価値についても書いてるつもり。そのスタンスは前作と同じです。何よりも、本の中の文章が、今という時代を記録するメモであることだけは間違いありません。毎回のマガジン原稿のように。

今回のマガジン原稿は、「A Bold Peace」大胆な平和、という言葉が原題の映画、「コスタリカの奇跡」から書き始めています。今号の話もちろん、「けんぼう BOOK ぶらす」に収めます。憲法のおはなし出前旅はあいかわらず続いているので、その合間をみつけては「BOOK ぶらす」の原稿を書き進めています。次号の短信欄には、本が書けました！っていう報告ができるといいな。いやいや、必ずそうしなくっちゃね。

中島弘美

家族療法構造派のサルバドール・ミニューチン氏が亡くなられた。96歳だった。私が勤務していた相談機関が、構造派に位置付けられていたこともあり、多くのことを学ばせていただいた。

以前、あるワークショップのなかで面接の記録ビデオをみる機会があった。それは、ミニューチン先生が80代の頃、10代の子どもと両親が同席する家族面接の映像だった。

身動きすることなく家族の話にじっと耳を傾け、少し間があった後、ゆっくりと話し始める。すると、子どもや両親は、神妙な面持ちで、その言葉にきき入っていた。

出版されている本に書かれている面接

の説明を読むことで、どんな流れなのか、雰囲気はこんな感じかなど何かと想像をめぐらしていた。ビデオのなかのミニューチン先生は、一つ一つの言動に迫力があつた。私には、家族が、ありがたいお言葉をいただくような、特別な場、まるで儀式のような空間に感じられた。

当時その映像をみたときに、高齢になっても面接していること自体すごい！なんておもっていた。いやいや、誰にでもできることではないといま改めてその気迫を思い出している。ご冥福をお祈りします。

藤信子

4月には私たちの京都集団療法研究会が実施している「月例グループ体験」の、新しいグループが始まる。週日の夜の90分のグループには、このグループを始めて20年以上たつが、長い間参加し続けるメンバーもいれば、今年も新しいメンバーが参加してきた。年をとってくると、仕事の量を減らしたいと思うが、グループを体験したいから、と新しいメンバーの参加があるので、なかなか止められない。週日の夜にわざわざ時間をかけて集まるメンバーのことを考えると、トレーニングの場を絶やしたくないという気持ちで続けているとずっと感じていた。しかしグループの中で話を続ける中で、新しい体験や感情を見つめることができるような気持ちを、私自身が覚えるからこそ、まだ続けているのだと今更ながら実感するこの頃である。

千葉晃央



関空発で仙台空港に、朝一便で出発して、最終便で帰ってくる旅程で、福島、宮城に足を運んだ。一人でレンタカーももつ

たいないのでマガジン執筆仲間の大谷さんを誘って同行。空港着後、レンタカーで一気に常磐道を南下して、浪江インターで高速を降りた。現地の道路事情については、以前沖縄の戦争遺構をめぐる平和研修で、一緒に福島の福祉事業所の方が教えてくださった。情報では帰還困難区域では、常磐道と国道6号に限っては通行証が不要とのこと。浪江インターを降りると時が止まってしまったような景色も多かった。荷物もそのまま、ガラスも割れたままの民家、鳥居も崩れた神社、商品も崩れたままのショッピングセンター、乗り捨てられた車、入り口も空いたままの無人のコンビニ…。行き交う車両は警察、消防、自治会のパトロール。そして、帰還困難区域のゲートに立つ警備員を運ぶワゴンのみ。車を降りると聴こえてくるのは鳥の声だけ。そして、福島第1原発を目指してできるだけいけるところまでと向かう。大きな送電線と作業をしているクレーンの先が見える原発入り口に着く。そこで線量の数値を見ると、小数点以下ではない数値に。そこを後にして、国道6号を北上。東日本大震災浸水区域ここから、ここまでの標識が繰り返す。除染土置き場も国道脇にあり。荒浜小学校に到着。震災遺構としての整備が進んでいる。訪れている人も多い。伝える施設としての役目を担っている。途中はかさ上げ工事、防潮堤工事…。その基礎に除染土の黒い袋が使われている様子も見られた。そこから南三陸まで移動。防災対策庁舎、南三陸さんさん商店街(復興商店街)へ。かさ上げの様子、高台にある豪華な民家、点在する仮設住宅が印象的。その後、大川小学校へ。



子ども達が授業で使っていた裏山、大川地区の成り立ち、海からの距離、海拔…。小学校の前には大川地区のことを伝える

ところもあり、被災前の町の模型で地元の方が伝えてくださった。「都会でもこれからこういうことがあるかもしれないから、気を付けて」。この言葉の背景には私が想像もできないような悔しさも、悲しみもあるに違いなく、それを感じずにはいられなかった。忘れられない1日になった。

中村正

近況にかえて: 団編集長への感謝の言葉

本来は前号がくぎりのよい時だったのが、その際に記せばよかったのだが、年度末の諸事万端やネパールに出かける準備など慌ただしくしており、三月遅れの感謝の言葉になってしまった。ご存知のように2017年度をもって団編集長が立命館大学を退職となった。この3月には退職記念講演もあった。大学院は確かに職場ではあるがゆるい組織ということもあり、比較的独自の動き方が可能で、また「教授」としてというよりもひとりの「個人」として、生き方と働き方をうまく統合していて、ユニークな立ち位置から、実践の領域ではもちろんのことだけど、さらに家族に関わる諸学会においても力を発揮している姿に学ぶことは多かった。私からすると気持ちのよい同僚関係が築けたかと思っている。

これは大人になってからの人間関係である。たぶんいけるだろうという秘めた確信があったのだが、2001年に新しいタイプの大学院(応用人間科学研究科)を開設するので立命館大学にきてもらえないかと押しかけて直前の話し合いを始めたとき、私は41歳だった。団さんも20歳近く若いことになる。この18年の間、同僚とはいえ私にとっては10歳年上の人の歳の取り方を学ぶという面もあった。また、団さんは前職と大学という具合に二回の職場の移動を経験しているので、節々の変化をどうし

てこられたのかについて改めて聞いてみたいと思うのは、私が今秋に60歳となるからかもしれない。別に10年単位で節目をつくって生きているわけではないだし、私にとっては「青春・朱夏・白秋・玄冬」という人生のうつろいを示す言葉が自然な感じもするので、変化する人生の、いまはどこなのだろうかと、改めて団さんを鏡にして映しだしてみたいと思う自分の気持ちがあるのは、何かの変化の時の揺らぎなのだろうか。社会制度が定年を決めているからでもあるのだろう。

途中、関係者を中心にしてこの対人援助学会を発足させた。2009年のことである。なんといっても対人援助学会のこのマガジンは団さん考案によるものだ。さらに2011年には東日本大震災があり、村本邦子さんの発案で今も続くプロジェクトが始動した。この取り組みも家族漫画展を中心にして団さんは欠かせない人である。かわらぬものとかわるものを見極めというかバランスの取り方を、自身の動き方としてもそうだが、漫画や講演や論考で絶妙に表現している。その動き方に学ぶことは多い。

2018年度から、立命館大学の応用人間科学研究科は公認心理師対応のこともあり、人間科学研究科へと衣替えした。拠点を大阪茨木キャンパスに移しつつある。組織としては変化しているが、社会の中の人間科学を考え、心理臨床をはじめとした対人援助を広いスタンスで把握していく姿勢は大切にしていきたいと思っている。まあそれでもプロジェクトは続け、お会いする機会も少なからずあるので、これからどのように生きていくのかさらに10年学ばせてもらえればと思っている。ひとたびの定年が立命館大学は65歳だが、向こう10年何をなすべきか団さんの姿をみなが

ら引き続き探ることとしたい。当然のことだけどもいつまで経っても追い越せない10年先の団さんが私の歳の時には何をしていたのだろうかと現在の私に問いかけてくるように考えているので、年の差を感じさせることなく共存し、一緒にいまを生きると感じることでできる良き先輩である。これから変わらぬ団さんでいてくださいというお願いとともに、退職という区切りなのでいちおうの感謝の言葉を記しておく場として、団さん自身が考案したこのマガジンこそがもっとも相応しかろうと思った次第である。

袴田洋子

今、なぜこんなテーマの連載を書いているのか、自分でもよくわからないですが、でも多分、もしかしたら、けっこう大事なことなのではないかと思って、書いています。ちょっと前は、書くのに時間がかかりました。でも、締め切りを過ぎてしまい、すみません。

団遊



みずすず書房

長男・小5の本をリビングに座って少し読んでいたら、隣にいた長女・5歳が「心のなかで読まないで！」と怒った。どうやら一緒に読みたかったらしい。「心のなかで読まないで」か、と思った。子どもたちの言葉には、力がある。対極にあるのは、昨今の日大記者会見か国会答弁か。

うちの妻は長男が通っていた保育園の

方針もあり、子どもの名言をノートに書き留めている。くすつと笑えたり、ドスンと本質的だったり、忖度のない言葉は、オリジナリティに溢れている。

この夏、長男・小5は友達4人と1泊2日の子ども旅に出る。その打ち合わせで出た「ぶどう狩りに行こう」という意見に一人の男児が「おれ、がり方がわかんないよ」と言った。行き先が山梨に決まり、河口湖方面か清里方面か、つまり水よりか山よりかで悶着しているときに、一人の男児が「山か海(正確には湖)か決めよう」と言うつもりで、「そろそろ山か梨か決めようぜ！」と叫んだ。

子どもたちがいつまでも飽きることなく話し続けられるのは、常に今思うことを忖度なく話し続けられるからかもしれない。

一方で多くの会社の会議はどうだろう。言うべきことと配慮すべき事項に注意しながら、予定時間ぴったりで結論が出るように話し合う。当然忖度にまみれることも多い。会議を無駄にしない秘訣は、参加者全員が子ども心を思い出すことかもしれない。

大石仁美

孫がひとり、小学生になった時、発達障害と診断されました。彼の頭の中の世界は、映像としてごめいていて、急に突飛もないようなことをしゃべりだすので、すぐには他者には通じず、トラブって暴力に発展することも度々でした。

小学三年生の時、担任は、興奮する彼を後ろから抱きとめて、「おちつけ、おちつけ。深呼吸！」と、身体を張って対処の仕方をおしえ、良いとこさがしをしてはクラスのなかに返してくれ、いつの間にかクラスで一目置かれる人気者になりました。子どもたちは、彼の特徴を理解し、ありのまま受け入れてくれたのです。

彼は一つのことに関心を示すと、頭の中はそれ一色に染まるようで、オリンピックの卓球試合をテレビで見て以来、卓球に夢中になり、ついに小学生大会で優勝！

今度はピアノ。これは音感に敏感だからとママが習わせたのですが、クラシックは堅苦しくておもしろくないというので、五

年生になってジャズに転向。それが楽しく、六年生になった今、「えっ！こんな難しいのを練習しているの？」と先生を唸らせるほどに。鍵盤の上を滑らかに走る彼のちいさな指を眺めながら、「発達障害とは、もしかして天才のことかも」と思ったりしているのです。

環境や周囲の人間関係に慣れるまで、すこし時間がかかるせいか、口数が少ないシャイな少年になりました。

「ぼくは発達障害や、生きていてもしょうがない。死んだ方がましや」と事あるごとに言っていた彼。

「人が出来ることが出来ない。でも人が出来ないことが出来る。それってすごいことだよ！」と何度言ってきたか知りませんが、その子が生き生きと自分らしく動き出したのを眩しく見ている私ですが、この**発達障害というネーミングの罪深さ**、なんとかならないの！！と専門家の先生方に言いたいです。

村本邦子

4月から研究科が改組改編され、人間科学研究科となり、大阪茨木キャンパスに移転した。前の応用人間科学研究科のM2院生はまだ衣笠キャンパスにいるため、朱雀キャンパスを含む各キャンパスを行き来しながら、毎日のように夜の授業があり、今年はかなり大変である。一瞬、暗い気持ちになったが、よく考えてみると、決して仕事が嫌なわけではない。毎晩、家でご飯を作って食べられないことが嫌なのだ気づいたので、昼夜2食分のお弁当を作ることにした。その日の動き方を考えつつ、明日は何にしようかなと考える楽しみができて、ルンルン気分の毎日である。私ってなんて単純で扱いが容易いんだろうとおかしくもある一方、何があっても不機嫌な人生を生きない努力を怠らない私って偉いよねと思った。それから、新しい研究科には博士課程後期ができ、自分の関心を共有できる研究仲間たちができた。今年はずっと研究者としても頑張ろうと張り切ってもいる。

國友万裕

西城秀樹さんが亡くなりました。僕が10

代の頃、西城さんは大変な人気で、アイドル雑誌の『明星』や『平凡』の表紙を飾っていました。そうそう、僕が初めて『明星』を買ったのは小学校の高学年の頃で、友達の影響で買い始めたのですが、母やおばさんたちから、「いまは男の子でもこんな雑誌買うのねー」と言われた記憶があります。ということは、僕の両親くらいの世代の男性たちはこんなものは買っていない。男が性的に見られる客体であることを知らずに大人になっているんですね。



こういう雑誌では、男性アイドルの裸が満載でした。僕はこういう雑誌をめくりながら、なぜ、プールでもないのにこれだけ脱ぐのか？ 不思議に思ったりもしました。また西城さんと言えば、郷ひろみと並んで、スター水泳大会の常連で、ビキニパンの水着姿もたっぴり披露していました。こういうのを見て、成長していった僕らの世代は、男の裸だって、性的なものとして見られているという意識は常に持っていたはずです。しかし、世間ではまだまだ一方的に女性が見られる客体であり、男性裸身は見られる客体でありえないんだというおかしな偏見がはびこっていました。

しかし、時代は変わりました。先日、ある男子学生に「この頃の子って、自撮りが上手いよねー」と言ったところ、「それは女の子でしょう。男は自撮りなんてしないですよ」と言われました。彼は、男が自撮りなんてするのはナルシストみたいで旗色が悪いと思っているみたいでした。「そんなことないよ。鏡の前で上半身裸になって自分のマッチョボディを自撮りしているやつはいるよ」と僕がいうと、「あー、カラダはありますけどね(笑)」と彼。顔をナルシスティックに自撮りするのはまだまだ女性だけれど、身体ナルシストの男子は結構いるということなのでしょう。いい時代になりましたよね。

そう言えば、僕も顔より身体の方が気になります。忙しい生活の合間を縫って、

スポーツクラブでのトレーニングに通うのはしんどいのだけれど、頑張って、ラグビ一体型のおじさんになりたいです。笑笑

北村真也

(京都府教育委員会認定フリースクール 学びの森 <http://manabinomori.co.jp>)

京都府亀岡市で、さまざまな学習者の変容をめざした能動的な学び場「学びの森」を運営しています。不登校の生徒たちが学ぶ「フリースクール」と「ハイスクール」、ひきこもり経験のある若者たちが学ぶ「ユースクール」、発達障害を持つ生徒たちが学ぶ「放課後等デイサービス」、学校に通う生徒たちが学ぶ「探究スクール」の5つのスクールを展開中。今年度から京都府総合教育センターで、教職員研修を担当いたします。

古川秀明

去年の夏の思い出を振り返りながら楽しく書かせてもらいました。好きな講演をして、歌を歌って、旅までできて、有難いなあと思います。

シンガーソングカウンセラー

西川友理

短大で保育士養成をしたり、福祉系の研修で講師をしたりとあっちこち落ち着いておりません。

このところ、コミュニケーションについて考える場に参加することが多くあります。

ワークショップなどで、対話が促進されると、ある瞬間に、自分が話しているのではなく、その場で感じたものが自分の意志から離れて、そのまま口をついて出て来るようなことがあります。私が話しているというより、おなかの中からその場に引き出されて着地点も見えないまま話し始めるような、それでいて言葉にし終わったとたんに腑に落ちるような、不思議な感覚。あれは、何なのでしょう。その場に居る人を全面的に信頼し、場に自らを委ねた時に時々起こる気がします。その場で自分の存在がよく見えない時に、周囲に手を伸ばすと、誰かや何かに触れ、触れた刺激によって自分の中から何かが生まれ、自分の在り方がさらに見えていく。そして

また自分も(意図するか否かに関わらず)、だれかが自らを確認する手掛かりになる。

コミュニケーションの中に、私たちはいるのだと思います。そういう場を、私も作りたいと思っています。

中村周平

昨年2月に無事修士論文を提出し、前期課程を終えることができました。担当教員や同じ研究科の後輩、情報提供やインタビューに協力してくださった多くの方に感謝申し上げます。4月から、同研究科の後期課程に進学しました。これからも研究活動に励みたいと思います。

坂口伊都

我が家に来た猫の1匹が外に出てしまった事件が起きました。オスで名前は「サン」。網戸ストッパーが外れていて、隙間が出来ていたようです。外から鈴の音が聞こえ外にいるとわかり、捕まえようと猫を追いついても逃げ足が早く手に負えません。玄関に隙間を開けて、餌と水を置いてみましたが帰って来ません。翌朝、小池さんに相談したら捕獲機を用意して、持ってきてくれました。ありがとう。玄関には



餌と水の他に段ボールも置きましたが、帰ってくる気配がありません。探してもみつかからない。愛護センター、保健所、警察にも連絡しました。翌日の夜中、捕獲機から猫の声がして、行ってみると近所のノラ猫さんでした。もうこの辺りにはいないのか、ケガしていないか、食べているのかと心配していました。翌々日の朝、洗濯物を干していると「ニャァ」と声がします。下を覗くとサンちゃんでした。急いで娘にチュールを持たせて捕獲。猫が外に出てしま

う意味を痛感しました。帰ってきて良かった～(涙)帰ってから、やたら甘えたさんになっているサンちゃんでした。

河岸由里子(臨床心理士)

【謎の予約番号】

毎年二回、団先生に来ていただいて札幌で家族理解のワークショップを開催している。今年も5月と10月に行くが、5月の日程に合わせて、ホテルと航空券を予約する。早めにとった方が安くなるので、2月末か3月初めに予約をとった記憶がある。そして、私の手帳の、5月のワークショップの日程の所に「予約〇〇〇〇〇〇〇」と番号が書いてある。航空会社によっては、予約は早く取れても発券が二週間前というところもある。そういう場合は二週間前に連絡が来る。きっとこの予約もそうだろうとのんびり構えていたら、連絡が来ない。え？あれ？なんで？それから航空会社を調べるが、予約番号の形式がどの航空会社とも合わない。ジャルパックやANAパック、じゃらん、るるぶ、Yahooその他、私が予約を入れそうな、考えうところのすべてを検索してもそのような予約をとった履歴がない。2月末か3月初めのメールのチェックもしたが、見当たらない。最後はホテルに電話をかけて、予約が入っていないかの確認もしたが、やはりない。ということは、予約を取っていなかったのか？いよいよボケか？夢か？「まあ、ダブルブッキングになるならなれ！とっていないよりは良いだろう」ということで、航空券とホテルの予約を取り直した。それはそれでよいのだが、この予約番号は、いったい何なのか？未だに謎のままである。

岡崎正明

西城秀樹と衣笠祥雄。地元ゆかりのある人が相次いで亡くなった。

訃報が伝わるとマスコミは偉業を称え、関連の本やCDが売れたりする。故人になる前と後でその功績に差はないはずなのに、愚かで忘れっぽい私たちは毎回同じような反応を繰り返す。

私は衣笠祥雄の現役時代を知っている最終世代で、小学生の頃のカーブは今と

同じくらい成績上位が当たり前のチームだったが、テレビでの扱いは今とは比べ物にならないくらい小さかった。友人と衣笠のことを「サルガサ～」などとふざけて呼びながらも、世間から脚光を浴びなくても静かに実力を示すチームのかっこよさが自慢だった。市民球場は古くて汚くて、座ってるおっさんは酒臭く、少しかがわしい雰囲気はしたが、それがなんだか大人の世界を覗くような気がしてちょっとした憧れだった。

今働いている職場は西城秀樹の実家の近くで、行きつけのお好み焼き屋もそばにあたりする。私の母は若い頃ヒデキの大ファンで、郷ひろみファンの妹と何度もモメたらしい。ヒデキが野口や郷よりいかに優れているかという解説を、何度も聞かされたような記憶がある。「ヒデキ、感激！」でバーモントカレーが有名だが、個人的にはジャワカレーの印象が強い。「西城秀樹みたいな大人の男が食べる辛いカレー」と、子ども心にいつかは食べてみたいものリストにインプットした記憶がある。

年を重ねると「全く知らないもの」に出会うキメキは少なくなってくるが、「どこかでつながりのあるもの」に触れる場面は増えてくる。「おー、こんなところで」「お久しぶり」って感覚も、なかなか悪くないものだ。

多くの人の記憶に残る2人に、感謝と祈りを込めて。合掌。

見野 大介

九カ月になる息子が悪事を働く楽しさを覚えてしまいました。パルクードの増設をして対応しております。しかし、イタズラする時のニヤニヤ顔は可愛いものです。

相変わらず休みなく制作しております。六月は東京吉祥寺にて2人展、七月は京都北大路にて2人展と控えておりますので、注文の器と並行して進めております。

そろそろ休みが欲しいと思う、今日この頃。

浦田雅夫

アフターケアの会メヌエットという団体で社会的養護を巣立った若者に関わっています。月に一度の食事会は和やかですよ。

詳しくは

<https://www.facebook.com/minuet.kyotoaftercare>

団士郎



久しぶりに身分、立場の変更があった。大学院を定年退職した。50才の時、早期退職という定年退職で公務員を辞めて以来のリセットである。

あの時はまだまだ子ども達の進学や、日々の生活ノルマなどを考えると、とても悠々自適の定年退職などとは認識できない決断の離職だった。

今回は元々大学への出勤ノルマに限られた雇用契約だったので、激変というようなことはない。加えて、仕事場D・A・Nとして、細く長くと言いつけてきた取り組みは何一つ変わらないので、4月からの日常も、相変わらず日本各地をウロウロしている。ただ、気分的には今までは違ったゆったり感が少しある。

そこで、退職のご褒美にして3月末から4月の初旬にかけて、これまでなかなか実現しにくかった「外国の町にチョイ住み」なんて企画を実行してみた。



パリ・モンマルトルの安ホテルに13泊14日という旅をした。この切り替えがとても良いスイッチになった。

これまで何度か想像したことはあっても、

なかなか具体化できなかった計画が実現できたことで、今更だが、新たなスタート気分になった。71才になるというのに、まだ新しい仕事、役割、使命をプランニングしている。

そしてどこかで又、見知らぬ町のチョイ住み第二弾も想像している。

大谷多加志

2012年10月、福島県を訪れた。勤務先の事業である新版 K 式発達検査の講習会を福島市で開催するための訪問だった。2011年3月の東日本大震災の後、自分たちなりにできることを模索しての、講習会の開催だった。福島の駅前に降り、道端のモニタリングポストやコンビニのレジ横に置かれた簡易型のガイガーカウンターに、原発事故が現実のものとして感じられた。講習会には東北地方を中心に定員いっぱい参加者があった。日程の関係もあり、沿岸部の方に足を運ぶことはかなわず、当日の SNS には『福島、また来ます！』と残っていた。

それから、6年。マガジン編集者の千葉さんの誘いに乗っかり、東北を訪れる機会を得た。思い立ちさえすれば、たった1日の時間があれば訪れることができた事実、なぜこれまで足を運ばなかったのかという思いも頭をよぎった。6年前に行けなかった沿岸部の道路をひたすら走り、福島第一原発に至る帰宅困難地域、南三陸の防災庁舎、津波被害のあった荒浜小学校、大川小学校を一日で巡った。三陸の入り組んだ海岸線はアップダウンも激しく、一本の道を辿る中で「津波到達地点」の標識が何度も繰り返して現れた。地形や海拔、原発や震源地との距離や方位によって、あまりに多様な震災被害のあり様をただただ目にし続けた。各地で、震災当時の様子や震災前の町並や暮らしを語り継ぐ方ともお会いした。津波が何もかも持ち去った地で、「ここには町があり、人の暮らしがあった」ことを証人として伝えていく、やり切れない決意を感じた。

「復興とは何か」という問いが、頭に浮かび続けている。壊れたものがもとに戻ればよいというものではなく、まして、もとには戻らないものばかりの被災地で、被

害はもうなかったことにはならない。この震災があった事実を踏まえた上で、それでも次の営みを紡いでいくことが、いつか結果的に「復興」という言葉で表せる時につながるのかもしれない。対人援助学マガジン編集長の団士郎先生が以前、「3.11以前ならしなかったであろうことを、世界に付け加えたい」と書いておられた意味が、ようやく自分なりにつかめた気がした。私たちは3.11の後の世界を生きている。そのことを自覚して、自分の持ち場で、自分の役割を果たしていきたい。

馬渡徳子



昨年度より、開始した「子ども食堂」。

今年度よりは、5月より、毎週月曜日の夕方に拡大、無料の「学習支援」が追加された。昨年度よりの夏休み、冬休み、春休み子ども食堂は、日中に、一回ずつ私の担当する「認知症カフェとのコラボレーション」も予定している。

夕方開催と学習支援が追加となり、「応援団の拡大と食材カンパ支援の拡大」という課題が生じた。地域の元学習塾経営者や、退職教員、地元の大学生といった人的資源だけでなく、初めてフードバンクの活用も開始した。地域の方々への食材提供の働きかけは、継続しているが、今回の打ち合わせで、「飲むこと」が大好きな新メンバーから、「居酒屋さんに、子ども食堂応援『乾杯貯金箱』の設置を依頼してはどうか」との提案があった。

お酒を飲めない私には、全くとって思いつかない発想で、その手立てを見つけてこられた方は、SNSで、全国の子ども食堂の取り組みを検索され、会議で提案下さった。

そうか！確かに、これならば、「地域のこれまでつながりのなかった方々に、活動を知っていただき、心ある方に、多彩な支

援から選んでいただけるなあ」と、感心した。出所は、名古屋市のとある商店街の取り組みだそう。

改めて、子ども食堂を運営するメンバーが、「地域の様々な年代の様々な立場の方々であることによる価値と影響」を、これからも、面白く生かしたいよねと話している。

竹中尚文

これから夏だ。夏は鶏飯が美味しい。“とりめし”ではなく“けいはん”という。私は奄美大島に行ったことがないが、奄美大島の郷土料理だそう。学生時代に、京都の白川通と北大路のT字路の所に「カブリチヨス」という店があって、そこでよく食べたモノだった。当時、カブリチヨスは学生にとっては何とか手が届く贅沢だった。南欧風のインテリアで、世界の珍しい食べ物が出て、食事をしながら何時間でも居れる店だった。議論を交わす若者やこ一番と女性を口説く若者でいっぱいだった。

その店の定番メニューの一つに鶏飯があった。蒸し暑い季節になると食べたくなるので、自分なりに作ってみた。きっとカブリチヨスで食べたモノとも、奄美大島のモノとも違うだろうけど、美味いよ。

【作り方】①干し椎茸を水で戻す。戻した椎茸を甘辛く煮る。巻き寿司の椎茸の味。②鶏肉（私は胸肉がいいと思う）をゆでる。鶏肉はグラグラ煮ないこと。スープが濁る。水に鶏肉を入れて、沸騰する前に火を止める。③しばらく置いてから鶏肉を取り出す。そのお湯に醤油と酒を入れて、グラグラ煮る。味付けは、ごくごく薄味に。干し椎茸の戻し汁を少し加えてもいい。

※ここまでの手抜き法。干し椎茸はまとめてたくさん調理しておいて、小分けして冷凍しておく。それを必要分だけ使用する。鶏肉は、ラップに包んで電子レンジ。スープは鶏ガラスープの素。薄味に。

④錦糸卵をつくる。少々厚みがあっても美味い気がする。⑤ワカメを準備する。乾燥なら、戻しておく。1~2センチで切っておく。⑥漬け物（沢庵や柴漬）をみじん切りにする。⑦粗熱がとれた鶏肉を、手で細かく裂く。鶏肉の繊維に沿って。⑧ゆずの皮を細

切りにする。

⑨鶏肉、椎茸、錦糸卵、ワカメ(きざみのりでも可)、漬け物、ゆずを皿にのせる。⑩茶碗にご飯をよそって、好みの量の具をご飯にのせる。⑪その上から茶漬けのようにスープをかけて、食べる。

【音楽】調理場で流すのは、ノエル・ギャラガーのドリームオンがいい。リズムカルなロック。ノエル・ギャラガーは元オアシスの中心メンバーである。オアシスを知っている人なら、ああそんな音だと思ふけれど、知らなければ、聞いてみるといい。クール！と言ってみたくなる音である。“dream on”は、アルバム Noel Gallagher's high flying birds に納められている。



【告知】

かつて、このマガジンに連載した「七日参り」が本になった。どうか買っていただきたい。

『七日参りのお話 —大切な人を送った人へ—』自照社出版 ¥1,000+税

川崎二三彦

LINE

電話にも出ず、留守電にも返事がない。どこで何しているのかさっぱりわからぬ息子だったが、連れ合いが始めたLINEからメッセージを送ると、すぐに反応してくることがわかった。孫の動画もLINEを通じて届けられる。これはなかなかのものだと思つて、この正月、自分もトライしたのはよいとして、スマホにインストールした途端、ホント、つながって数十秒とか数分の間に、次々とメッセージが届く。確かな知り合いもいれば、こちらの記憶があいまいで、よ

く知らないような人からの連絡もあった。



あまりの早業に恐れをなして、以来、今に至るまでそのまま放置している。LINEは今や世界で2億人超、我が国だけでも7千万人を超える人が利用しているらしいから、社会の趨勢どころか、連れ合いからも遅れを取ってしまった。時代から取り残されないためにはどうすればいいのか。誰か助けて。(2018/06/01記)

荒木晃子

我が家にイケメンがやってきた！彼の名はジュニア。生後5か月を過ぎたちょっと訳ありの元気・陽気・能天気な男の子。父犬はミニチュア・シュナウザー、母犬はトイプードル。つまりミックス犬(要は雑種)。日本ではシュナプー、海外ではシュヌードルとも呼ばれ、後になって、最近人気の犬種だと知った。

血統書付きの犬と、同犬種との間で生まれた子犬はその血統を受け継ぐことができる。これまで(今おもえば30年以上に渡り!)3匹のミニチュアシュナウザーを家族に迎え最期を看取ってきたが、みな血統書がついていて、何かと手続きが必要なことがあった。ジュニアの両親は血統書付きの純血種ではあるが、互いの犬種が違うため生まれた子に血統書は継承されることはない。登録は地方自治体の保健所のみだ。さらに、彼を産んだ母犬は、ミックス犬を産んだことが知れる(ばれる?)と、その(伝統ある?)血統書を剥奪されるというから驚きだ。そういう理由(訳)で、両親のいる犬舎から(締め?)出され、彼は保護犬として我が家にやってきた。

愛犬あんりを看取った後、しばらくの間彼女の面影が脳裏から消えない時期に見事なペット・ロスを経験した。一時は、もう二度とペットを迎えるのをやめようと決

めた。こんな悲しい経験は二度としたくない、そう思ったからだ。最初からいなければ、失うこともない、そうすれば悲しむ必要もない。確かにそう思っていた。ときに、考えていた(予想した)結果と、実際に行動を起こして得た結果が異なることはよくある。ジュニアに出会い、悲しみを心の引き出しに収め再び笑顔を取り戻した。そう、我が家は、ぶらす・わん！で家族。ようこそ我が家へ！

木村晃子

働き方改革 2018春 ~私の場合~

この4月から、私は、自分の人生においての働き方改革を実行した。政府も、「働き方改革」などと謳っているが、そんなことは全く関係ない。世の中は、しばしば都合の良い人たちが、都合の良い理屈を取り付けて、庶民を思いやっているような言い回しをする。そんな言葉に惑わされてはいけない。自分の生き方や、自分の働き方は、自分の決定権がある部分においては、できるだけ自分で決めていきたいものだ。とは言っても、自分で決められる状況になるまでには、人によって年齢差はあるだろう。

私は、36歳の時にサラリーマンを辞めて起業した。44歳の時に、もう一度サラリーマンに戻った。何のことはない。起業家になりたかったわけではなかったから。そして、49歳になる今年、「不本意なことはしない！」という決意のもと、サラリーマンを辞めて、フリーランスへ転身した。

末娘は、高校2年生。まだまだ、養っていかなくてはならない。家賃と、食費と、学費(通学費用を含む。田舎から通学するには、ずいぶんと交通費の割合が高い。)の確保は必須だ。フリーランスとは言っても、いきなりこれらが賄えるほどの仕事があるはずもない。しばらくは、オールフリー(ノンアルコールか?!)ではなく、ハーフフリー&非常勤職員という身分を得た。非常勤だから、ボーナスはないし、時給である。けれども、保険がついているのはありがたい。これで病気になっても大丈夫だし、将来のための年金もなんとかなる。家賃と、食費と、

学費は確保した。

働き方改革の実行から、1か月が経過した。実にいい！

オールフリー、ハーフフリーではなく、ストレスフリー！なのだ。非常勤仕事は、所定の時間ぴったりに終了する。規則正しい日常を送ることができる。忙しく、疲れて、「ごはんを作るのは嫌だ」ということもなく、毎朝弁当を作り、晩御飯を作り、娘たちと過ごす時間を堪能している。体調もすこぶるいい。

稼ぎがこれまでの3分の1くらいになった事実は、節約生活を意識せざるを得ないが、それにも代えがたいものを手に入れている。これから、少しずつ、フリーランスの幅を広げていく準備をしている。与えられたことに丁寧に組み込んでいった先に、また新しい何か広がっていくような気がしている。まずは、健康であること。

不本意なことをしないために、時には、本位ではないことも引き受けていこうと思っている。ただ、それは、誰かに強いられた不本意ではなく、自分で納得した上での、「本位ではないけれど、本位にたどり着くための手段。」ということとして…

北海道 フリーソーシャルワーカー

三嶋 あゆみ

ツッコミどころ満載の国会答弁。

こんな状態で法案通したり、外交したりして大丈夫なのか。



サウトツヤ

1週間にわたって、Valsiner 先生の考えに基づく授業や講演を間近で経験することは非常に貴重な機会であり、アタマをフル回転させる1週間となった。おかげで、現在執筆中の原稿がかなり改変されることになったし、前期に開講中の文化心理

学の内容もかなりブラッシュアップされることになった。

鶴谷 主一

今回は、残念ながら休載いたします。編集長のお計らいで短信のみ投稿させていただきます。

子ども子育て新制度が始まって3年、「待機児童解消！」この掛け声によって、いまの乳幼児教育の世界は変化の波に飲み込まれています。

業界外の方には「幼稚園と保育園が一緒になってこども園になったんだって」「事業所内保育所が企業主導型っていう制度で補助金が出るようになったんだって」

「来年の消費税 UP に伴ってぜーんぶ保育料は無料になるらしい」というようなニュースは届いているかと思います。

その裏でどこからお金をもってくるか政治的な綱引きを含めて、現在進行形で交渉されているのでしょうか。間違っても「地方で頼む！」と丸投げされないことを願っています。投げられても受けられないよ！ということです。そして、無償化をきっかけに、子どもをどんどん預けちゃおう！という風潮ができてきたら…。現在でも保育士、教員不足で悲鳴を上げている現場は、どんなことになるか心配です。教職員の問題はダイレクトに子どもに影響します。

OECD加盟国の中で乳幼児にかかる予算が最低ラインの日本が、その額を増額することは価値のあることだと考えますが、その使い道は子どもたちの成長発達にきちんと繋がるところにかけてほしいと願っています。

原町幼稚園

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder